「自然に学ぶ粋なテクノロジー　なぜカタツムリの殻は汚れないのか」

石田　秀輝　著

A5版，223頁，定価1700円（消費税別）
（化学同人）

地球規模での環境破壊や環境汚染が大きな話題になっており，毎日のように新聞などマスコミを賑わしている。しかし，自分も含め，本当の意味での問題意識は意外と低いのではないだろうか？　問題意識は持っているかもしれないが，例えば地球温暖化によって気温が数度上がったときのことを真剣に考えている人は非常に少ないと思う。既に環境問題について様々な対策が提案されているが，太陽光発電やハイブリッドカー，或いは低消費エネルギー製品への買い換えなど，良いとは判っていても非常に高価なものが多い。一方では，チームマイナス6%やこまめなスイッチのON/OFF，待機電力OFFなど，個人ができる身近なエコ活動も啓蒙されている。

この本は，生物多様性の劣化，エネルギー・資源の枯渇，地球温暖化など全てのリスクが2030年頃に収束し危機を迎えることを前提に，自然支配を基盤としたテクノロジー観から自然と共存するテクノロジー観，ネイチャー・テクノロジーに変更を提言している。副題にもあるようにカタツムリの殻，シロアリのアリ塚，クモの糸，モルフォチョウの鱗粉，ヤマゴボウのマジックテープなど自然界のエコ・テクノロジーを紹介し，利便性や効率のみを追求する（物欲をあおる）テクノロジーから自然観を持った（精神欲をあおる）テクノロジーへの移行の必要性を説いている。つまり，“あったら良いな”から“無くても大丈夫”に変える必要がある。例えば，現代ではコンピュータは無くてはならないものであるが，数十年前には家庭にコンピュータの姿は無かった。でも，それなりに満ち足りた生活を送ることができた。評者の家庭にも数台のコンピュータがあり便利にインターネットなど楽しんでいるが，今までも本や新聞など情報源は無数にあったし，インターネットで調べたものも結局は印刷して利用することがほとんどである。本当に必要なものか自問自答したい。そして，他にも必要のないものがたくさんあるに違いない。

本書にも至る所に記述されているが，生きることを楽しめる社会を創造することが人類の大きな課題となるように思う。

（株式会社　三菱化学アナリテック　環境技術部　杉田和俊）